

府中町ふるさと歴史散歩

〔第41回〕

大化の改新と律令制と安芸国の成立⑤

安芸府中の土地は狭く、広大な平野をもっていないが、国郡制の施行と同時に、この地に国府が設置されたと考えるのは、以下のような根拠に基づくのである。

まず、府域の広さは位置決定論とならないことである。国府の府域は延喜式でいう「大国」ランクで八町（約872m）四方の広さで、それ以外は方六町（約654m）以下であったので、「上国」ランクの安芸府中の府域の大きさは方六町以下でよかった。また、狭い土地でも国府が設置された例として、長門国府（下関市長府町）があり、国府は必ずしも大規模である必要はないのである。

次に、国分寺が国府に近接しているケースがほとんどの中で、信濃国（長野県）の国

府の例では、国府は松本市、国分寺は上田市にあり、その間は50キロメートルも離れている。したがって国府・国分寺一体論も決定的な根拠とはならないのである。

さらに、瀬戸内海に面する国の国府の立地をみると、沿海の地、または河川交通の便利な所にあるものが多く、西条の地では、内陸河川交通がまったく望めない。これに対して安芸府中は、古代から広島湾が深く湾入した良港であり、水運の便に恵まれていたことは間違いない。国府と中央政府との連絡や貢納物や租税の輸送は山陽道による陸上輸送を原則としていたが、天平勝宝八年（766年）の太政官処分にて春米（白でついた米）の海上輸送を認めており、国司の赴任はもっと早くから船

の使用を許している。つまり、中央政府は陸上交通から海上交通政策への転換をはかっていた。とはいえ、山陽道による陸上交通も依然として重要な役割を持っていた。

府中町には「湊」（現在の宮の町付近）の地名があり、また古代の大動脈である山陽道の安芸駅家とされている下岡田遺跡がある。このように陸上交通の駅と海上交通の「湊」が重なり合った安芸府中こそ、古代の交通機能上きわめて重要な役割を果し、早くから注目されていたに違いない。

そもそも、わが国が律令制度を導入し、中央集権的な国家づくりを行った目的は、緊迫する国際情勢に対応するためであった。隋唐帝国は高句麗へ何度も遠征を行っており、

わが国はその帝国へ律令制度を学ぶために何度も使節を派遣している。その一方で隣国の百済を救援するため軍を派遣し、天智天皇二年（663年）に白村江で倭国（日本）・百済の連合軍と唐・新羅の連合軍が戦っており、結果として倭国・百済の連合軍が敗れている。

この戦いの翌年に、わが国は防衛策として北九州・瀬戸内沿岸にかけて水城や山城を築いて海辺の守りを強化し、

食料備蓄の倉庫群を建設した。当然ながら兵士・武器・糧秣などの海上輸送の整備と軍船の調達・建造がこの時期における中央政府（朝廷）の最大の関心事であったことはいうまでもない。

これらの背景とともに、わが国が遣百済使、遣新羅使、遣高句麗使、遣隋使や遣唐使を派遣し、これらの国からの使節が都へ来航したことを考えると、瀬戸内海が国際的な交通機能を持っていたことは、容易に想像できる。古代日本の表玄関である大宰府と都の間において、安芸国は対外政策上の観点と造船立国の観点か



下岡田遺跡（昭和41年（1966年）第4次発掘調査の様子）

ら大宰府に次いで重要な拠点の一つであり、その統治機関は水運の便が良かった安芸府中に存在したと考えるのが合理的だろう。

このような見地から、安芸国の国府は当初から安芸府中に設置されたと考えたい。一般的には国府の近辺にあるとされる国分寺・国分尼寺は、当地では狭いため、他の地域（西条盆地）に造らざるをえなかったのである。

府中町文化財保護審議会会長

横田 禎昭

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272